



TITLE:

京大広報 No. 473

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 473. 京大広報 1994, 473: 844-851

ISSUE DATE:

1994-10-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209161>

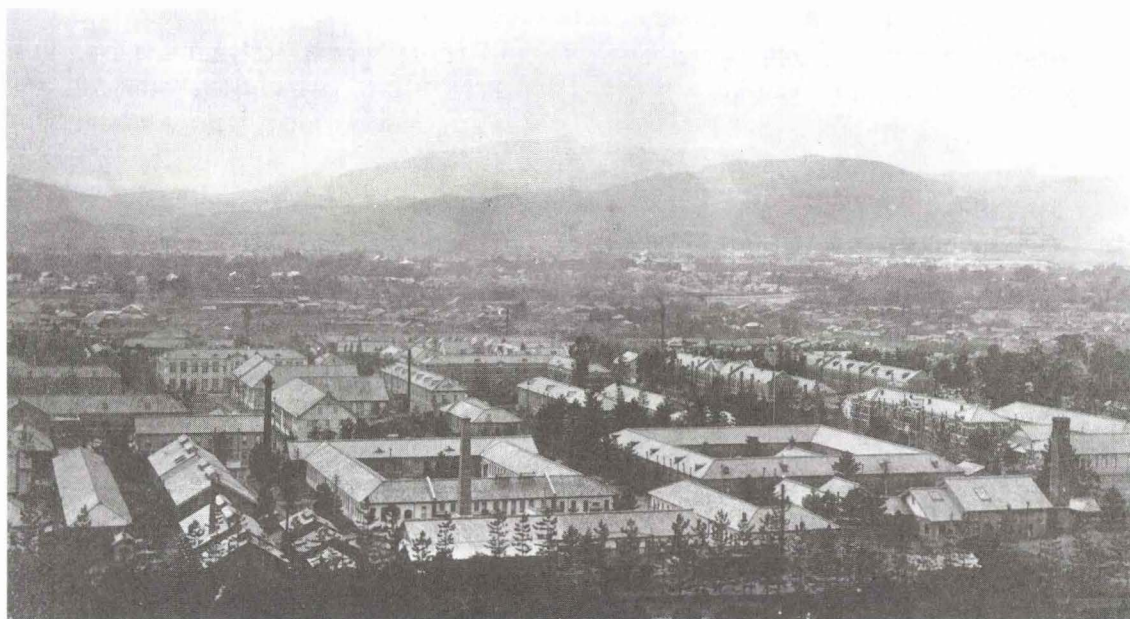
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 473

京都大学広報委員会



時計台が建つ以前の大正7（1918）年頃の本部構内

—工学部土木工学教室アルバムより—

目次

<大学の動き>

- 寄附講座「国際予防栄養医学講座」の設置……………845
名誉教授称号授与式……………845

<部局の動き>

—公開講座—

- 木質科学研究所・農学部「今なぜ木材か」いちばん
身近なエコマテリアル、木材の再発見……………845

<紹介>

- 薬学研究科遺伝子薬品学講座
—脳の大海で遺伝子を釣る—……………846

—京都大学の百年（第2回）—

- 京大の創立と「日出新聞」……………847
訃報……………848
日誌……………849

<随想>

技術教育さまざま

名誉教授 石原安雄……………850

<コラム>

私と留学生

内海博司……………851

＜大学の動き＞

寄附講座「国際予防栄養医学講座」
の設置

平成6年10月1日、大学院人間・環境学研究科に寄附講座「国際予防栄養医学講座」が設置された。

概要は次のとおりである。

1. 部 局 名 大学院人間・環境学研究科
2. 名 称 国際予防栄養医学講座
3. 寄 附 者 大塚製薬株式会社
代表取締役 大塚明彦
4. 寄附金額 総額300,000,000円（分割納付）
5. 設置期間 平成6年10月～平成10年9月
（4年間）
6. 担当教員
助教授相当 奈良安雄
助 手 相 当 荒井宏司（併任、医学部助手）
水嶋春朔
7. 研究目的
遺伝子の分析と栄養環境の制御により、疾患の予知・予防を可能とし、人類の健康長寿の実現に貢献することを目的とする。
8. 研究内容

高齢化社会の到来で最大の死因となるであろう循環器疾患について、その遺伝・環境因子をモデル動物を用いて分析する。また、遺伝子分析による疾患の予知と栄養による疾患予防法の開発をすすめる。さらに、地球上の種々の地域環境の分析とその制御、及び身体の外的内的環境の調和を栄養学的に研究する。

9. 研究課題

- (1) 疾患モデル動物の病因遺伝子の分析と栄養による予防法の研究
- (2) ヒトの病因遺伝子検出による疾患予知法の開発と栄養による予防法の研究
- (3) 遺伝・栄養相関からみた地域環境評価とその保全・発展のための栄養学的研究

名誉教授称号授与式

10月5日（水）午前10時から、総長室において

菊池晴彦医学部長出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、阿部光幸元教授（医学部）に称号が授与された。

＜部局の動き＞

—公開講座—

木質科学研究所・農学部

「今なぜ木材か」いちばん身近な
エコマテリアル、木材の再発見

木質科学研究所と農学部林産工学科では、10月1日（土）・2日（日）の両日午前10時から午後4時まで、今年新たに建設された木質科学研究所木質ホール（宇治市五ヶ庄）において公開講座「今なぜ木材か」を開催した。

この公開講座では、一般市民を対象に、地球環境にやさしい優れた原材料である木材への関心とこの分野の研究への理解を得るため、木質科学研究所と農学部林産工学科の研究成果をまじえながら、「今なぜ木材か」について解説した。また、それ自体が木質構造の耐久性や機能性の実験体である木質ホールを含めた研究施設の見学と展示説明を併せて行い受講者の理解を深めた。

今回の受講者は125名で、会社員、公務員、教員、学生、主婦と幅広く、年代も10代から70代にわたっていた。中部・関東地方からの参加者も数多く見られ、未来資源としての木に対する関心の高さがうかがわれた。

講義題目と講師は次のとおりであった。

世界の木、日本の木—住まいの

中の自然の恵み— 佐 伯 浩

暮らしの中の木材 佐 道 健

木材の生分解とキノコの生化学

島 田 幹 夫

木材保存と環境 高 橋 旨 象

今話題の木構造 増 田 稔

地球を救う節約の科学

—木質材料科学— 佐々木 光

（木質科学研究所・農学部）

<紹介>

薬学研究科遺伝子薬品学講座

—脳的大海で遺伝子を釣る—

有効性と安全性に注目した医薬品作用とその制御に関する教育、研究を新たに展開することを目的として、薬学研究科の独立専攻、薬品作用制御システム専攻が平成5年度に発足した。その発足に伴い、本講座は情報薬学講座、分子作用制御学講座と共に新設された。以下、本講座がこれから目指す一つの研究を紹介したい。

人間の脳は100億以上の神経細胞からなると考えられている。さらに、個々の神経細胞は複雑なネットワークを形成し、多くの場合、複数の神経細胞から情報を受け取り、複数の神経細胞に情報を流している。この複雑な情報のネットワークを利用し、脳は様々な精神活動、生体の代謝反応を調節している。しかし、この情報のネットワークの異常が様々な病気の原因にもなっている。特に、高齢化社会に進むにつれ、脳内の情報のネットワークの乱れに起因する病気は増大するものと考えられる。しかし、脳内の情報のネットワークについて明らかにされている部分は少ない。これらの情報のネットワークを明らかにするためには、神経細胞間の情報伝達に関与している神経伝

達物質の全貌を明らかにする必要がある。

これまで明らかになっている神経伝達物質を大別するとアミノ酸、モノアミン、ペプチドに分けられる。その内、ペプチド（神経ペプチド）は含量の少ない神経伝達物質であるが、その種類は極めて多様であり、未知の神経ペプチドも多くあると推定されている。本講座は未知の神経ペプチドを検索することにより、これらの神経ペプチドの作用異常に起因する病気の成因解明、治療薬の開発のための基礎的な貢献を目指している。

これまで明らかにされた神経ペプチドは、直接脳神経系から単離されたものは少なく、その多くは消化管から発見された消化管ホルモンが脳神経系にも存在することがみとめられ、神経ペプチドとして分類されたものが多い。また、神経ペプチドの多くは、その生理活性を指標にして単離されてきた。しかし、従来の手法では、これ以上新規な神経ペプチドを発見することは極めて困難であると考えられる。従って、新規な神経ペプチドを発見するには、これまでとは異なった手法の開発が必要となる。さいわい、最近の分子生物学的手法の進歩により、遺伝子の単離、構造解析は極めて容易になってきた。特に、DNA構造の自動解析装置の出現で多数のDNAの構造解析でも容易にできるようになった。本講座では、神経伝達に

関与している可能性のある因子の遺伝子、特に、神経ペプチド遺伝子に焦点を絞り、遺伝子解析から新規な神経ペプチドの検索を試みる。

脳は他の臓器と比較して極めて複雑な構造をしている。脳を地球に例えれば、様々な国家に相当する大脳皮質、視床下部、海馬などの領域が存在し、さらに、それらの領域には、都市に相当する神経細胞の集団である神経核が存在する。この複雑な脳内での遺伝子発現地図の作製も、最近の技

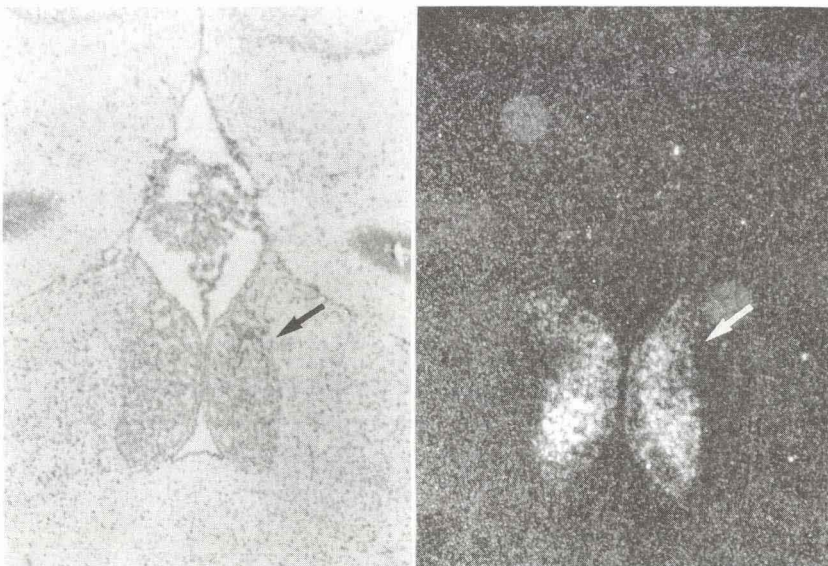


写真1 脳内遺伝子発現地図の例

左図はラット間脳の視床上部の細胞染色の切片標本。右図は左図と同一領域のオートラジオグラム (in situ hybridization)。内側手綱核 (矢印) に繊維芽細胞の成長因子 (FGF) 受容体-4 の遺伝子のメッセンジャー RNA が発現している。

術の進歩により容易となってきた(写真1参照)。

脳に特異的に発現する遺伝子を単離し、その遺伝子発現地図を作製し、特定の神経核に特異的に発現している遺伝子を検索し、その構造を解析することにより、新規な神経ペプチドの検索を試みる。

ヒトの遺伝子の数は10万以上と考えられている。その内、脳神経系で発現している遺伝子の数は約3万と推定されているが、その大部分が未解明である。遺伝子発現地図の作製及び遺伝子構造の解析が容易になったとは言え、多くの遺伝子が発現している脳から新規な神経ペプチド遺伝子を見いだすには、多大の労力と困難が伴うことは容易に想像される。しかし、未知の神経ペプチド遺伝子あるいは神経伝達に関与している因子の遺伝

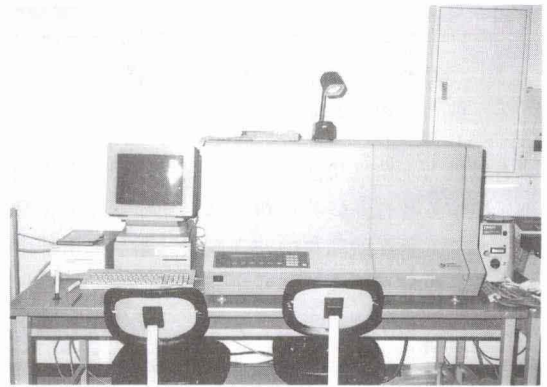


写真2 遺伝子の構造を自動的に解析する DNA シークエンサー373A

子との遭遇を夢見て、脳の大海で遺伝子の大魚を狙って釣り糸をたれていく。

(薬学部)

—京都大学の百年(第2回)—

京大の創立と「日出新聞」

現在の「京都新聞」の前身「日出新聞」(以下「日出」と略称)は、京大の創立過程を調べる上で貴重な史料である。1895(明治28)年から京大の創立された1897(明治30)年6月の紙面を追って行くと(当時は1日1回の発行)、京大創立に関する実に様々な事実や主張がみられる。

たとえば、当時医科大学を大阪に置くか京都に置くかが問題になっていたが、その問題について京都側の動きが丹念にフォローされている。周知の如く、結局は京都設置が決まるわけであるが、1896(明治29)年4月23日付の「帝国京都[原文のママ]大学の設計に就て」をみると、京都の中でも開業医の内には御室付近に医科大学を置くべきだと主張する者もあったらしく、御室は大阪より不便であるとその主張の「心得違ひ」をたしなめている。

京大が創立されてしばらくして、斬馬剣禅が東西両京の大学について論じたことはよく知られているが(講談社学術文庫『東西両京の大学』参照)、京大が創立される以前にその先駆版ともいえるべき「東西大学」という連載ものが「日出」に載っている(1896年3月8日～6月10日)。執筆者は霞城山人と名乗っている。タイトルだけから推定すると、東大と京大の本格的な大学比較論のようにみえるが、実際には一種の空想科学小説である。

時は1899(明治32)年である。その年、彗星が大接近し、地球と衝突するかどうかをめぐって、世界の破滅の可能性を認める東京の若き「星学」博士と、その心配はないという「西都」の老大家(理学博士)との論争があった。後者は、一度うとうとして若き「星学」博士の説を裏づける事実が起った夢をみるが、実際には自説の正しさが証明される。そしてこの老大家の娘と若き「星学」博士が結ばれるという筋になっている。この話は、ドイツ人の手になる作品の翻案であり、執筆者自身がそのことを明記している。

「日出」はまた初代総長候補の人名を相当数挙げている。その内、代表的な人物についてみてみよう。1896年4月2日付の「最近電報」欄は、東京発として、京大の総長は枢密顧問官・九鬼隆一氏もしくは文部省専門学務局長・木下廣次氏に仰せつけられるであろう、とする説があることを伝えている。木下は現実に初代総長となった人物である。九鬼は、最近の「読売新聞」(1989年6月7日付朝刊)の伝え

るところによれば、すでに1891（明治24）年に「京都大学条例」という私案を作っていた程、早い時期から京都に大学を設置することを望んでいた人物だった。

「日出」にもどり、1896年6月17日付の「京都大学総長」という記事をみると、総長候補については種々風説があるが、目下のところ決定していない、ただ「其向きの説」によると、折田彦市三高校長、木下専門学務局長、外山正一博士、菊池大麓帝国大学理科大学長などの名が挙っている、という。折田三高校長が有力な候補であったことは他の史料からも窺える。立命館大学の図書館に、京大の初代理工科大学長・中澤岩太の手記と思われる「京都大学制定ノ事情」という文書（ただし本人の字体かどうかは不明）が架蔵されているが、その文章中に、元来京都大学の設立に主として尽力したのは折田三高校長であるから、世間の多くの人びとは同氏が総長になるだろうと思い、同氏もあるいはその意なきにしもあらずということだったのに突然内命が木下局長におりたのは云々、という趣旨の文章がある。また菊池大麓は、後に京大の第3代総長となった。「日出」自体は、加藤弘之や細川潤次郎のような人物を総長候補として推薦している（1896年6月18日付「京都大学総長の候補に就て」）。

1897年4月1日付「京都大学総長」という記事は、木場貞長普通学務局長が総長に任命されるという者があるという風聞を伝えている。

その後、木下廣次が総長に内定すると、「日出」は、「京都大学総長に望む」（同年6月2日）と題し、京都は育英の地に適しており、総長が30年来「沈衰」している青年の志気を高め、東京の帝国大学に対して関西の文運を振興せしめ、「官臭を帯びざる」豪傑を養成することができるなら、これは人生の「一大快事」ではないかと論じている。

京大に対する熱い期待が伝わってくる文章といえよう。

（百年史編集委員会 宮本盛太郎）

訃 報

一戸 時 雄 名誉教授

本学名誉教授 一戸時雄 先生は、9月13日逝去された。享年70。

先生は、昭和21年京都帝国大学理学部を卒業され、引き続き同大学院で学ばれた後、京大理学部助手、講師、助教授を経て、同37年本学防災研究所教授に就任され、同40年本学理学部教授に配置換になり、地球物理学科地殻物理学講座を担当し、同62年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、先生は、防災研究所附属鳥取微小地震観測所長、同附属上宝地殻変動観測所長、理学部附属地球物理学研究施設長及び同附属地磁気世界資料解析センター長を歴任され、大学の管理運営に貢献された。

先生の専門は、地殻物理学であり、重力の時間的変化の研究や測地学的な手法による地震予知の研究を通じて社会に貢献された。重力の時間的変

化の研究では、自らの設計による重力変化計を西日本の数点に設置して連続観測を実施し、我が国の重力の時間的変化の研究の先鞭をつけられた。また、測地学的な手法による地震予知の研究では、傾斜計や伸縮計を用いた長期間の連続観測の結果に基づいて、地震に関係する地殻変動を見だし、地震予知の研究に貢献された。

さらに、先生は、日本学術会議地球物理学研究連絡委員会委員、文部省測地学審議会委員、同学術審議会専門委員、建設省地震予知連絡会委員などを歴任し、我が国の理学研究の発展に貢献された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（理学部）

青 木 伸 好 大学院人間・環境学研究科教授

大学院人間・環境学研究科教授 青木伸好 先生は、9月22日逝去された。享年56。

先生は、昭和40年京都大学文学部を卒業、同42

年同大学院文学研究科修士課程を修了，同43年本学教養部助手，同46年関西大学文学部専任講師，助教授を経て，同53年4月本学教養部助教授に就任。平成2年4月教授に昇任され，引き続き同4年10月大学院人間・環境学研究科に配置換えとなり，人間社会論講座を担当された。

先生の専門は人文地理学で，特に地域をどのように把握・認識し，これをどのように記述・説明するべきかという，地理学の根本命題に関する研究で数多くの業績をあげられた。著書として，『地域の概念—都市と農村の関係において—』がある。

また，先生は，大学院人間・環境学研究科と総合人間学部の創設に際しては，教養部改善案協議委員会委員長として多大な貢献をされるとともに，学部学生，大学院学生の教育・指導にも熱心に取り組まれ，多数の優秀な後進を育成された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院人間・環境学研究科)

木曾好能 文学部教授

文学部教授 木曾好能 先生は，10月3日逝去された。享年57。

先生は，昭和36年本学文学部を卒業，本学大学院文学研究科博士課程哲学専攻を終えた後，文学部助手，同助教授を経て，昭和63年文学部教授に就任された。

先生の専門は哲学で，イギリス経験論哲学に関する歴史的研究，及び現代分析哲学の手法を用いた存在論，認識論の研究において数多くの優れた業績を残された。なかでもヒュームの理論哲学（存在論と認識論）に関する綿密な研究は他の追随を許さない高度なものであり，その成果は『ヒューム「人間本性論」第一部の翻訳と研究』（近刊予定）に示されている。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(文学部)

日 誌

(1994年9月1日～9月30日)

9月6日 平成6年度京都大学職員研修国際交流担当職員研修（8日まで）
7日 同和問題委員会
8日 発明審議委員会
13日 評議会
〃 大学院審議会
19日 建築委員会
21日 国際交流委員会

21日 国際交流会館委員会
27日 評議会
〃 平成6年度京都大学職員研修語学研修（英語初級コース）第1日（12月2日まで毎週火・金曜日 総40時間）
〃 カナダ国 ラヴァル大学 Michel Gervais 総長他2名来学，総長及び関係教官と懇談
30日 学位授与式

<コラム>

洛書

留学生との関わりは、2回生の時に「京大留学生友の会（その後20数年間ほど存在した）」という学生サークルを率いたのがきっかけでした。この会は「学生として、対等の立場で日本人学生と外国人学生とが交流し、互いの文化・風土・社会を理解して、ひいては国際親善を図る」という高い目的を掲げていましたが、実際は留学生の宿舍探しや自主講座で日本語を教えたりする一方的な奉仕活動が多いものでした。当時は、大学の教育スタッフ、事務スタッフ、宿舍等の留学生の受け入れ体制が皆無の状態なのに、賠償留学生制度も始まり、学部学生として来日した留学生達が日本語や宿舍のことで本当に困っていました。

「留学生を引き受けます」という下宿屋さんに出かけて、その留学生が欧米ではなく、東南アジ

アの留学生であることが判ると、断わられることも多々ありました。このような中で、国費留学生が待遇改善を求めてストライキを行なうという事態も何度も発生していました。また、受け入れ体制の不備と日本人の意識の低さに嫌気がさしたマレーシアのH氏が帰国する事件等も起こりました。何気なく見た数年後のテレビで、反日運動家として活躍している彼の姿を垣間みた時には、頭から冷水を浴びせられた感じがしたものです。

私自身の活動の中で最大の企画であった、文部省・外務省・毎日新聞社の後援を得て行った「見学旅行」で、今でも覚えているできごとがあります。当時の平澤総長や木村教養部長等が出席された「見学旅行報告会」に、旅行参加者24人（留学生13人、日本人8人、教官1人、事

務官2人）の内、待てど暮らせど東南アジアからの男子学生7人が出席しませんでした。

出席しなかった理由は、彼らが旅行中感じた遣り場のない憤懣と悲しみでした。もともと旅行の趣旨は「主にアジア諸国からの留学生と日本人学生とが共同生活をしながら旅行し、瀬戸内の素晴らしい自然に触れるとともに、その周辺に散在する各種産業等日本の真の姿を捉えたい」ということにありました。見学旅行には数人の欧米系留学生も参加しましたが、行く先々の工場の関心も、テレビや新聞のインタビューも、それらの留学生にしか集まりませんでした。

旅行の報告集「旅」には、シンガポールのH君が次のように記しています。「日本はよくアジアの一員といわれるのですが、残念なことは、この旅を通じて、またいろいろなことを通じて、日本はアジアの一員として

私と留学生

内 海 博 司

認められにくい。やはりヨーロッパの国々の一員といった感じです。日本人は白人に対して劣等感を持って、白人の言うこととか行動とかを批評なしに絶対に正しいと信じる。ですから、よく白人の真似をする。日本の地理的位置はヨーロッパより東南アジア諸国に近いにもかかわらず日本人はヨーロッパのことをよく知っている。しかし高い教育水準を鼻にかける日本人は東南アジア諸国（日本の新聞がいわゆる後進国と名づける国々）のことについては無知識と言えるのです。ですから東南アジアの人民の気持ちを理解できない。」

あれから30数年経った今、マスコミをも含めた日本人の意識は少しは変わったのでしょうか。

（うつみ ひろし 原子炉実験所教授）